

ヨアンネス・クリマクスにおける「神の前に立つ人間」とは誰か

寺川泰弘

序

筆者はこれまで、ヨアンネス・クリマクスの著した“*Scala Paradisi*”（『樂園の梯子』）の神へと向かう霊的な三〇階段の第一の階段から第三の階段に標づけられた個々の主題に基づいて考察して来た。そこにおいては、「修道の初めに立つ人間」としての修道士が「神の前に立つ人間」と昇華して行くために、どのような生の在り様が追求されなければならないか、が展開された。

クリマクスにとって、修道士とは、不断に絶えることのない修練のうちに彼の生全体が依拠しており、日々、神の呼ばれる声に従って神へと向かう霊的な苦闘を祈りのうち

に闘い抜くことによつて、今ある自らを超えて、一段一段、神へ近づいて行こうと希求する存在であった。しかし、こうした存在となつて行くためには、「この世の放棄」という障壁を乗り越えて行くこと、そして様々な諸相を通じて襲い来る悪魔との相克を経て、神をひたすら仰ぎ見る生への向き直しこそが要求される。

したがって、クリマクスはこの初期の三段階において「この世の放棄」を実現するための方向性を教え示す。それが、日毎、神に従従することを通じて新たとなつて行くことを目指して実践に従事する修道士の精神的、内的な心の在り様である、*anotain*（放棄）、*anpoantheia*（欲望からの離脱）、*ésvutelia*（流謫—この世の寄留者となること）と標づ

けられた道行である。これらを総合することによって、クリマクスの求める「神の前に立つ人間」としての生の輪郭がいつそう明らかにされることであろう。それを本論の考察の中心に置きたい。

1. 修道の初めに立つ人間の歩む道行とは

クリマクスは修道の究極の完成すなわち神の愛へと到り着くまでの三〇の階段を用意しているのだが、その行路はまさに一段一段とそこに足をかければ順々に昇っていきけるものでもなく、いつ昇り終えたのか、またいつ踏み外して落ちるのかも分からない言い知れぬ畏れといつ終わりが告げられるかも判然としない。それは、あたかも隧道の遙か先に仄見える光を頼りに覚束ない足取りで歩む道行に譬えることができよう。

第一の階梯 (*gradus 1*) にたびたび現れる、*πῶς* (火)、*ἀρχή* (熱意) ある *τὸ ἀρχή* (切望) の言葉は、修道の初めの頃の熱情の溢れを端的に言い表している。しかし、いざその修道の真つただ中に入ると、それらの言葉の背後には人知を超えた悪魔の抗い難い奸計に対する絶えること

なく打ち続く闘いがある。修道の初めに立つ修道士の心のうちには、この世に遺してきたものへの立ち去り難い執着と後悔が蠢く。そうした情況が誘因となつてたびたび神を喪失したことや自暴自棄から神を一瞬でも疑つたことへの裁きが否応なく差し迫る恐怖といった様々に襲い来る葛藤のうちには決して強いばかりではない修道士の根本的な心の在り様が深く映し出される。

このことが修道の初めに立つ人間に修道士を取り巻くのかつびきならない情況なのである。しかし、それでもその道行きには、不断の絶えることのない脈々とした修練のうちに修道士の生き様が込められて行く。彼らは、日々、前進 (*προχωρησις*) することによって、絶えざる自己の成長と超えてひたすら実績を積み重ねることに精魂を傾け、精勵克己する。修道士は「神との合一」に向けての抑えることのできない渴望に気づけば気づくほどそれを充足させようと闘い抜く自分を、尚、止むことなく求め続ける。

クリマクスは自らの神へと向かう修練のなかで蓄積された様々の戦略を通じて、修道士の行く末を暗示し、そして悪魔との闘いの諸相に、時として打ちひしがれもする彼を

励まし、自らを常に超え出でて螺旋状に伸長していく成長に向かわせる。こうしてひたすら修練に精励すること自体が、神の愛 (*agapē*) へと近づいて行くための「神との合一」に向けての道行であることを、クリマクスは修道士に教え示すのである。

1. 1 *ἀποταγή* (放棄) とは何か

クリマクスはまず、第一の到達目標である「この世の放棄」*ἀποταγή τοῦ κόσμου*」に至り着くために、最初の階梯において修道士を取り巻くあらゆる情況の *ἀποταγή* (放棄) を要求する。

クリマクスが修道の初めに立つ人間、すなわち修道士に求めているのは、全面的に神へと自分自身を投げ出し、何も持たず、何もかも棄て去って、神の前に立とうと意志することの計り知れない困難さに立ち向かうことであり、神こそが一人であり、その前に立つ己がどこまでも無化されて行くことを徹底的に希求すること、それと同時に、その己自身が神のうちに消えて行くことの恐れにどこまでも対峙しようとする決断であろう。

クリマクスは、*ἀποταγή* (放棄) に三つの意味を付与している。(1) 自分自身の意志からこの世のあらゆる関わりから遁れる者となること、(2) 人間の心のなかの最も容易ならぬ敵対者である功名心の放棄、(3) 彼を取り巻く情況と関わりあう人々の放棄、とりわけ家族との別離、である。

人は神へと行き着くために、この世において自分が占めていた場所、情況、人間関係を離れなければならない。言い換えれば、生きることの方向転換、否応のない生の向き直しが徹底的に迫られる。こうして、修道士を取り巻く情況に関する放棄を通じて、この世の不安は潰え、消え去って行く。クリマクスはこの世の富が却って増幅させて行く不安 (*ἀνῆ*) からの自由を追求する³⁰。不安の存在は、まさしく人間が自己欺瞞に捕われ、いまだに *ἀπονομήσεια* (離脱) に到達し得ていないということの紛れもない証しであると捉えているからである。

ἀποταγή (放棄) の核心をクリマクスは、両親や血縁関係にある者たちとの決定的な別離に置く。というのも、彼らの存在は彼自身の破滅への誘因となるからである。それは、彼にこの世への帰還を果たすための金の橋を架けることに繋がる。聖書が伝えるように、「いかなる者も二人の

主に兼ね仕えることはできない」(マタ6・24)、のであり、

「誰でも天におられる私の父の意思を行なう者、その人こそ私の兄弟であり、姉妹であり、母だからである」(マタ12・50)というイエス・キリストが示した親近者に対するそれまでとはまったく新たな視座の転換が修徳生活の初めに立つ者の心のうちに、それに徹底的に倣うようにと熾烈な圧力を負わせる⁴⁾。もし人が彼自身の今までの生の情況を絶とうと意志するならば、彼にごく近い人々、親兄弟、それまでに築き、触れ合った周囲の人々や環境をも同様に放擲しなければならぬ。とりわけ、天の国に憩いたいと思うならば尚のことである。それによって、ようやく本当の意味での *anousia* (放棄) に行き着くのである、とクリマクスは言明する。そこまで徹底して放棄することをクリマクスは修道の初めに立つ人間⇨修道士に迫る。何と荷の重い決断が彼らに強いられることであろうか。そうした別離には身を振るほどに切ない悲しみがあるであろうに。しかし、そうした生を意志する者にクリマクスは、それがいかに耐え難く苦しいものであろうとも、この世の放棄 *ἀποσχίη τοῦ κόσμου* に敢然と立ち向かう者には、その先に彼らを待ち享けるであろうこの上ない恩恵が訪れること

を示唆する配慮を忘れない。

厳しく、非情な艱難辛苦は確かにその生には必要となる、そして秘められた多くの苦痛も。とりわけ、私たちの知性にとって、貪り食いすぐに嘔みつく犬に相応しい、無思慮で空虚な人生を捨て去った後では。そして、その生は単純さと穏やかで猷身的な熱意の力で、ついに純潔と、悪魔の様々な讒言をも愛するしかないところまで行き着く。だから、私たちは勇気を持つとうではないか。私たちは、熱情によってひどく支配され、移ろいやすき者であり脆く弱い存在ではあるが、確固とした信仰をもって、私たちの寄る辺ない果敢なき、精神的な無力さを、キリストを面前にしての告解においてこそ、示そうではないか。そして私たちは確かにキリストの授けによって、私たちに値するもの以上のものを獲得するであろう。謙遜の深淵の彼方に辿り着くまで、止むことなしに私たちが謙りさえすれば⁵⁾。

このクリマクスの言葉のうちには、そのような生き方を

意志した者への鼓舞とそうした生き方を決した者への共感に根ざした慰藉と、条件付きではあるが一筋の光明にも似た希望が込められているのを見て取ることができよう。

その希望とは、たとえその生が試練や艱難に満ち、多くの苦痛が伴うとしても、イエス・キリストの援けによって私たちに値するものそれ以上の恵みが与えられるということである。だから私たちは限りなく弱い存在であろうともキリストに徹底的に依拠して、そこに勇気をもって「神との合一」を目指して突き進もうではないか、とクリマクスは言う。だが、言外に、その生には測り知ることのできない謙りの深遠に辿り着くまでの果てない闘いがあり、この先、幾重にもわたって修道士たちに襲い掛かる試練のあることをも告げる。

しばらく、*anoxyn*（放棄）について、クリマクスがどのように考えているかを彼自身の言葉を辿ることで、追ってみたい。

この生のあらゆる善きものを自らの意志で断念した者のすべては、彼らの多くの罪のゆえに、神への愛のゆえに、間違ひなく来るべき神の王国を目指して生きる

ことになろう。たとえ、彼らがいかなる動機から意志したにせよ、彼らのこの世からの撤退は不条理なことであつたらう。しかし、その生を選び取ったことが結果的に何をもたらすかは、私たちの闘いによる葛藤の卓越した仲裁者である神がその生の道行と結末をただ見守るだけである。⁶⁶

ここで、重要なのはこの世からの放棄や撤退が、修道士自らに由来する自発的な行為に基づいた決断からなされることであろう。たとえどれほどそれが高貴な意志からの促しであつたとしても、その行為はこの世的な価値観から見れば、不条理なことは否めない。しかし、この放棄の後の何もかも棄て切つた身の自由のなかにこそ、えもいわれぬ豊穡さの秘密が隠されているのではないか。何かを喪うこと、何かを放棄すること、何かを断念することは、それらが押し付けられたものであるならば、彼らにとって限りなく苦痛で不毛なものでしかないだろう。しかし揺らぐことのない信仰のなかで修道士が自由にそのことを受け容れ、獲得しようと思志したものであるならば、それは汲み尽くすことのできない生命の湧水をもたらすであろう。なぜな

らば、その彼らは神に導かれ自身の本性を超えるところに導かれるからであり、そして、彼の生の在り様は何よりもその行為全体を通じて、来るべき神の王国を目指して生きることにつながるからである。それが至高の自由でなく、いつたい何なのであろうか、とクリマクスは修道士に問う。しかし、その自由は神の導きによって至り着きもするが、同時にそこに至る道行に見出すのはどこまでも黙して語らぬ神を見るばかりであることの言い知れぬ孤独をも教えるのである。

肉体を身に纏いながら天国への上昇に取り掛かろうとしている者たちは、必然的に暴力と立ち向かわなければならぬ、そして止むことなく苦しまなければならぬ。そのことは、とりわけ、彼らのこの世の放棄のはじめには、快樂に向かおうとする彼らの傾向や無感覚な心が、悲しみ嘆くこと (*metibos*) によって神の愛と純潔の変わることのない永遠の心根の状態へと目に見える悔恨にもなつて変貌を遂げるまでは、避けては通れない道程である⁸⁰。

闘うことは、闘いの最初からじわじわと耐え難く危険なことであるのは真実である。そこに私たちの敗北の子兆を見るときも、私たちは毅然として闘いを始めようではないか。闘いの初めには、精神的な魂もその後、心の弛緩状態に陥り、だらけて気が緩むことがあつたとしても絶えざる祈りのうちに、最初のころの熱情の記憶によって覚醒せられる。やがてその魂は再び拍車が掛かるようにと祈りに応えて神はその彼に新しい羽を生じさせる⁸¹。

どれほどの苦行に身を晒そうと、修道士の闘いによる葛藤の卓越した仲裁者である神は、その道行をただ沈黙のうちに見守るだけである。修道士が闇の試練に遭い、その途上で神を見捨て、悪魔の力に引き渡されようとしても、神は彼の苦痛を取り去ることもせず、黙したままである。彼はひたすら神を待ち望む信仰によってそのことに耐えるしかない。それを支えるのが悲しみ嘆くこと (*metibos*) である。それは心からの悔い改めであり悔悟であり、それらが修道士の心の底の暗い憎悪や罪科を涙となつて流し去り、洗い清める。

私たちの放棄の初めのころは、私たちには神の意思を
実践するために多くの艱難と痛恨の悲しみが必要であ
る。しかし、何らかの進歩を遂げたとき、私たちはも
や悲しみを感ずることはない。あるいは、ごく少しし
か感じなくなるであろう。私たちの抱くこの世の執着
が私たちの宗教的献身によって滅ぼされ、抑制された
とき、私たちは神の意思を多くの悦びと、跳躍と愛、
神的光輝を持って実践しようとする¹⁰。

自らの弱さにおいてますます自己自身が放擲されて行
き、主の常なる臨在を確信して新たにされて行く自分を実
感するとき、修徳修行もまた新たにされるだろう。それは、
「多くの悦びと、跳躍と愛、神的光輝を持って実践しよ
うとする」ことへと質的な変貌を遂げて行く。そのときに
新たな羽が彼らの後背に生え、それまでの自己をさらに超
え出で、羽ばたいて行くであろう。

こうして、修徳生活の道行きに何らかの進歩を遂げ、最
初のころの神への熱情がいつそう深化し定着すると、修道
士の心はもはや悲しみを感ずるというよりは、悦びがそれ
に取って代わるのを感じる。神へと向かう熱情がいつそう

深く沈殿し、徳がその想いに縦横に織り込まれ純化して行
くからであろう。

主が闘いに着手したばかりの初心者闘いを少しでも
安楽なものにさせようと慮るのは、あなたがたの力の
度合いに応じてその最初の闘いに適応させようとする
意図からである。それはあなたがたがすぐにこの世に
立ち戻ることのないようにするためである。それゆえ、
あなたがたは絶えず主の信頼のうちにあって喜びな
さい。あなたがたすべては主の僕たちであり、この
ことのうちに、主があなたがたを担ったことの愛の
最初の刻印があり、主の召し出しの徴があるからで
ある¹¹。

このクリマクスの言葉は、それまでの修徳生活の困難さ
ばかりが強調され浮き彫りにされた闘いが、実は、神が闘
う者の力量に応じてハードルの高低を按配して臨ませてい
るのだという神の深慮があること、決して一人一人の修道
士たちに越えられない障碍が与えられているのではないと
いうことに思い至らせ、その先におとなうであろう幸福を

予感させる。クリマクスは、そこに新たな修練の途に励もうと意志させる神の意図があることを教える。そしてその意図のうちには、主の召し出しの徴があることを告げる。

主の召し出しとは、神から私たちの心のなかに吹き込まれる霊の息吹によって永遠の生命への切なる願望が呼び覚まされることであり、その神の呼ばれる声を聞いて、それまでの生の決定的な向き直しに招き入れられたことを意味する。

おまえの青春時代の労苦をキリストに捧げなさい。そのようにすれば老人になって、おまえは、心が平靜であることの尽きることのない良き富の宝庫を享受するのである。青春時代に積み上げた善行は衰え疲れ果てた人びとの老境を豊かにし、励まし、慰藉するだろう。私たちの若き日々を、情熱をもって働こうではないか。そして、警戒しながら追い求めようではないか。というのも、死の時はいっ来るとも判然としないからであり、まことに私たちには悪意と敵意に満ち、ずる賢く、不実で、決して眠ることのない強力な敵がいるからである。それも姿を顕わにすることのない実体

のない敵である。その彼らは手に松明をもって、神の聖堂を焼き払おうと虎視眈々とその機会を狙っている^[12]。

この言葉のうちには苦境のうちにあっても尚、生きようと思志する者を励まし、その心を穏やかに、また静謐にさせる慰藉が秘められているように思われる。たとえ、悪意と敵意に満ち、ずる賢く、不実で、決して眠ることのない強力な敵、それも姿を顕わにすることのない敵である悪魔との凄絶な闘いに明け暮れようと、神による召し出しによって生きることの向き変え (*ta akrouia*) を今まさに生き生きと体感し得るならば、それを喜びとせずして何を喜びとするのであろうか。主において働くことができるならば、それは無上の恵みであらうから、である。

anotyni (放棄) についてのクリマクスの言葉から見えて来る、この第一の階梯に標づけられた *anotyni* (放棄) の意義とは何か。

それは、まさしくマタイ福音書に記されている、「もしあなたが全き者でありたいと思うなら、行って、自分の財

産を売り払って、「これらの」貧しいものたちに与えなさい。そうすればあなたは、天に宝を持つ。そうして私に従って来なさい」(マタ19・21)というイエスの言葉の体現にあった。それはまた、クリマクスの言う「自身の本性を超えるところに至り着くのであり、そして何よりもその行為全体を通じて、来るべき神の王国を目指して生きる」と「への絶対的な生の向き変えであり、そのような生を揺るぎない確信をもって生き抜くことであつたと言えるのではないか。

使徒パウロが神の生命から疎遠になり、鈍感になっていく異邦人になるな、と警告したあとで、エフェソの教会共同体の成員に対して論じた言葉のうちに、クリマクスの示す *ἀποταγή* (放棄) によつて獲得される生の在り様が現れ出ているように思われる。

「あなたがたが、以前の生活様式に従い、欲望の欺きに導かれて滅びつつある古き人を脱ぎ棄てて、あなたがたの思念〔を規定する、神〕の霊でもつて新しくされ、さらには、真実の義および聖さに基づき神に模して創造された新しき人を身に着けることが。」(エフェ

クリマクスにとつての、第一の階梯 *ἀποταγή* (放棄) とは、この世にあつてキリストそのものである「新しき人」を修道士である彼らの心の内なる深遠に解き放ち、身に着けさせることが、「キリストにある」ことの真実であると確信させることであつたのではないか。そのことが、フェルカ―が指摘するように、*ἀποταγή* (放棄) を通じての生の向き変えが、日毎、新しくなることを目指して実践に従事する修道士の精神的、内的な心の在り様¹³⁾を確固として定め *ἀποταγή* (放棄) → *ἀποπονήθεια* (離脱) → *ἐλευθερία* (流涕―この世の寄留者となること―) の三つの方向に向けて展開して行く道行の駆動力となつて行くのである。

1. 2 *ἀποταγή* (放棄) から *ἀποπονήθεια* (離脱) へ

第二の階梯では、クリマクスは様々な諸相を見せるこの世のすべての欲望から離脱すること、すなわち「欲望から超然としてゐること」、分けても修道士の胸のうちに立ち去り難く残る両親や家族への甘美な郷愁を引き起こす絆を

決定的に断ち切ること、そしてキリストにどこまでも付き従うことを意志させることに *diapontákeia* (離脱) の核心を置く。

真に主を愛する人、来るべき神の国の到来を真に探し求める人、自らの罪によって真に後悔し始めた人、永遠の苦悩と裁きの恐怖を真に心に留める人、自分自身の死の畏れに真に怯えを掻き立てられる人、そのような人は、金銭に関する気懸りや不安、財産、両親、友人、兄弟、あるいは現世の世俗的な栄光、地上の悉くのものをもはや愛することはないのである。

この世の物事と結び付くすべてのものを断ちきるとき、そして彼のあらゆる心配事から自らを解き放ち、彼自身の身体さえも憎悪するようになるとき、あらゆることから彼自身が剥ぎ取られて行くことを実感するとき、その彼は気に懸ける心配も躊躇いもなくキリストにひたすら付き従うであろう。常に天を仰ぎ見ながら、そして聖なる人キリストの言葉に従って、そこから救いを受け取る。¹⁴

霊的な修徳生活を意志して歩もうとする者であるならば、彼をこの世に留まらせようとする金銭欲や名誉欲、あるいは食欲や性欲などはもがき苦しむ果てにはあろうが、自らを律して超えて行くことができるであろう。しかし、己が己であることの依って立つ根拠ですらある家族との絆を断ち切ることは、己を無に帰することに連鎖するがゆえに、修道士をこの世に留める最大の障碍になり得るであろう。それゆえ、このことを剥ぎ取り、超えて行くことが真にキリストに従うこと、神に向き合うことである、とクリマクスは言明する¹⁵。したがって、以下のように、クリマクスは徹底してイエスに付き従うことを修道士に要求するのである。

主は私たちの闘いの初期における脆さを良くご存知である。そして、この世の人々の間にいることがどれほどにか安逸であることか、あるいは彼らとの会話が私たちをこの世の方へ再び身を委ねさせることになるであろうということをも知っておいでになられる。そういうわけで、「主よ、まず行って私の父を葬ること

を許して下さい」と尋ねた若者に主は答えて言った。「私に従え。そして死人どもに彼らの死人たちを葬らせよ」(マタ8・22)と¹⁶⁾。

だが、このクリマクスの言葉の背後にはイエスの厳然たる命令が置かれているのである。

「私〔を愛する〕以上に父や母を愛する者は、私に相應しくない。また私〔を愛する〕以上に息子や娘を愛する者は、私に相應しくない。また、自分の十字架をとって私の後に従わない者は私に相應しくない。自分の命を見いだす者はそれを滅ぼすであらう。また自分の命を私のために滅ぼす者は、それを見いだすであらう。」(マタ10・37―39)

もはや、キリストよりも自分自身の家族を愛することはしない、と言う峻厳たる孤高の生の在り様に、修道士は否応なくイエス・キリストへと向き直させられるのである。ここに「第二の階梯」における「家族からの離脱」の要諦がある。

修道士にとって誰が真の家族なのかを考えさせることは修道生活を続けて行く上での最大の危機、すなわち「この世の放棄」(ἀποστρέψις τοῦ κόσμου)を乗り越えられるか否かに直結したであろうと思われるがゆえに、クリマクスは次の言葉を修道士に投げかけてその意味を考えさせる。

主を悲しませるよりあなたがたの両親を悲しませる方がよい。というのは、両親はあなたがたが愛してやまない者たちに破滅を引き起こし、そしてあなたがたを罰に引き渡すのに対して、主はあなたがたを創造し、そして救いもするのであるから¹⁷⁾。

いともすべてのことにおいて、主は私たちの教師として自らを露わに示す。なぜなら、主はしばしば肉に繋がるご自身の係累から明らかに離れていたから。そこで、ある者が彼に言った。「あなたの母上とあなたの兄弟たちが、あなたに話そうとして外に立っています(マタ12・47)」。良き師である私たちの主は即座に教えた。「誰でも天におられる私の父の意思を行なう者、その人こそ私の兄弟であり、姉妹であり、母だからで

ある（マタ12・49）」と¹⁸。

そして、愈々神の意思を行う者、キリストに付き従う者の真の家族とは誰なのかを、クリマクスは修道士に明らかに告げる。

おまえの罪ゆえの重荷を担い、耐え忍ぶためにおまえとともに苦しみ喘ぎ、分かち合うことができるその人こそがおまえの父となろう。そしておまえの罪ゆえの汚れを清めることができる悔恨、それをおまえの母とせよ。天国に向けての競争にあつて、おまえの傍らで働き、闘う戦友、それをおまえの兄弟とせよ。死の想起、それをこそ、おまえから永遠に離れることのない妻とせよ。おまえの嘆息、それをこそ最愛の愛し子にせよ。おまえのからだをおまえの僕とせよ。もし、おまえが彼らを友とするならば、臨終の時に、天使がおまえの支えとなるであろう。主を追い求める者たちの、これが家族である（¹⁹マタ詩23・6²⁰）。

神と共なる生を選び取った者であるならば、もはや「血

の繋がりに」における家族ではなく、「神との繋がりに」における家族こそが、修道士の真の家族なのである。

修道の初めに立つ者が主の創造と救いのうちにある修徳生活に一身を捧げるためには、神と「神との繋がりに」における霊的な父子、兄弟姉妹をこそ真実の家族として共に生きて行け、とイエス・キリストが厳命するゆえに、修道士は、「血の繋がりに」としての家族を越えて行かなければならない。そのことこそが *anormētia*（離脱）の究極の課題であり分水嶺であったのである。

2. *anormētia* (放棄) から *sevrētia* へ

2. 1 *sevrētia* をどう捉えるか

「*sevrētia*」とは、*'A Patristic Greek Lexicon'* によれば、^①外国の地に寄留すること、^②流刑にあつて故国を追放されること、^③この世のあらゆる関わりを放棄して孤独のなかで生きること、と定義されている。

ここで問題となるのは、^②についてである。「流刑にあつて故国を追放される」ということの「追放」には両義

的な意味がある。それは、創世記に見るアダムとエヴァの「樂園追放」における天国からこの世への「追放」²⁾であり、他方、天の王国をめざして自発的にこの世を遁れるという意味での、この世からの「追放」という方向性における両義性である。

しかし、クリマクスがここで問題視しているのは地上に生きる修道士の神への信従の在り様である。「流刑にあつて故国を追放される」における故国とはこの地上であり、この地上から天の王国への道行を修道士が意志して、あたかも流刑にあつてこの世から追放され、世捨て人(クセノス)のようにこの世に寄留する者となる、という意味に捉え直すことができるのではないだろうか。そうした立場に立脚すると、パウロの次の言葉が「*ferreia*」の意味を考察するときに生き生きとした説得力を与えるように思われるのである。

「というのも、多くの人たちが——彼らについて私はあなたがたにしばしば語ったし、今は涙にくれながら言うが——キリストの十字架の敵として歩んでいるからである。彼らの最後は滅びであり、彼らの神は〔自

分の〕腹であり、そして〔彼らの〕栄光は彼らの恥のうちであり、彼らは地上のことがら〔をのみ〕思い抱いている。なぜならば、私たちの本国は天にあるからであり、そこから救い主なる主イエス・キリスト〔が来られるの〕を、私たちは待ち望んでいるからである。〔フィリ3・18—20〕

ここには、パウロの「この世」に囚われ執着する者たちの愚かさへの指弾とキリストに真に付き従う者たちの本来的に帰属すべき「本国」とは何処なのか、が端的に示されている。ここでの「本国」= *politeia* は the government (政府) と訳するよりは、*politeia* = citizenship (国籍) と捉えた方が妥当であろう。つまり修道士の帰属すべき国籍は何処なのかという、改めての問いかけでもあろう。

そして、そのパウロはひたすら、「後ろものものを忘れ、前のものへと身を伸ばしつづ、目標をめざして追い求める〔ようにのみ努めている〕。すなわちキリスト・イエスにおける神の、上への召しという賞を」(ロ・フィリ3・13—14)めざして闘うのである。その確固とした意志は、「私は〔世を〕去って、キリストと共にあることを希求している」(フ

イリ1・23)というキリストの現存に共に与えることにおいて至福の生を生きたいとの願いのうちにさらに強固にされる。そのことが、キリストに付き従う者すべての心のうちに継がれ、キリスト・イエスにおける神の、上への召しという賞をめざすがゆえに、この世からあたかも罪によって遠方へと追放された身、換言すれば「流謫」の身であるかのように「自発的に」この世にその身を置くことによって本国へと上げられるまでひたぶるに走り続ける生き方をどこまでも希求して行くのである。

そのことは、後述するようにクリマクスが修道士に希求する「宗教的献身の目標に到達すること」²²⁾を目指してこの世の一切の事どもを、後を振り返ることなく捨て去って一途に進退する姿勢と共通する生き方に連鎖する。

このようにして、キリスト・イエスにおける神の、上への召しという賞を徹底してめざすのであれば、もはやこの世の生は遠景に後退するしかなく、それと同時に、本国に連なる途を突き進む「神の前に立つ」修道士としての生がくつきりと前景に披かれて行くのであるが、肉なる身は流謫の身として死して潰える日の来るまで、言わば二重国籍者のように、この世に寄留することになろう。

このことを踏まえた上で、「*severētia*」を単に亡命と訳することより、「流謫—この世の寄留者となること」と捉え直したいと思うのである。

2. 2 「*severētia* (流謫—この世の寄留者となること)」とは何か

クリマクスは、第一の階梯から第三の階梯に至るまでの階梯を通じて、修道の初めに立つ修道士に「この世からの離脱」を徹底して求め続ける。第一の階梯では、世俗的な生活の放棄、第二の階梯では、様々に襲い来る欲望の諸相から超然と離れること、第三の階梯では、「本国」への途を目指しつつ、この世の寄留者となること、を追求することであった。こうしたこの世の一切の放棄、離脱へと向かわせる駆動力を創出する母たる源泉を、クリマクスは、この「*severētia*」に見出している。

離脱とは卓越した出来事である。そして、自由意志によってこの世から追放されること、すなわち流謫とはその母である²³⁾。

クリマクスは、その「流謫」とは何かを第三の階梯の冒頭で説く。

故国からの流謫とは、宗教的献身の目標に到達することから私たちを妨げる一切の事どもを、後を振り返ることなく捨て去ることである²⁴。

「流謫」とはこの世が、神を求めてやまない修道士を流刑に処してこの世から追放するのではなく、神の前に立つ人間としての生を希求しようと意志するならば、それに対して妨げとなるこの世の一切の佇まい、関わりを、後を振り返ることなく修道士自らの意志によって遁れ去って、あたかも流刑者のようにこの世に寄留する者となることである、とクリマクスは言う。したがって、この「流謫」にはむしろこの世にあつてどこまでも神の意思に信従するという深い敬神に支えられた生の在り様があるのだ、とクリマクスは修道士に諭し、その在り様を以下のように示す。

流謫、それは慎み深い振る舞い、未だ知られていない

英知、外面には現れ出ることのない知識、目立つことのない隠れた生、秘められた意図、何ら明らかにされない考え、乏しさへの希求、困難を求めることの情熱、神の望みを求めることに対する揺るぎのない信念、愛の満ち溢れ、空虚な栄光の放棄、静寂の深み、である²⁵。

しかし、こうした生の在り様はイエス・キリストがそうであったように、この世には受け容れられるものではない、とクリマクスは言う。

預言者が彼の故国(ヨハ4・44²⁶)ではつねに軽蔑されるのであれば、主が言うように、私たちの自由意志による流謫が空虚な栄光の機会とならないように私たちは目覚めていようではないか。なぜなら、流謫は神から分かち難くある私たちの存在を取り戻させるために、この世のあらゆることから離れて行くことだからである。流謫によって追放された者は絶え間なく打ち続く悲嘆(*tribulation*)を愛する人か、あるいはそのために働く人である。故国を離れる人は、世捨て人

(ἐπιζητῶν) のように一切の自らの係累、そして他人に対するすべての愛着を断ち切つて遁れ去る者である⁽²⁷⁾。

流謫によって追放された者は、悲嘆を愛する人か、あるいはそのために働く人であるとクリマクスは説く。嘆き悲しむこと (μεταβοῶν) は神の現在の喪失から生じる嘆き悲しみに存する。それは神の不在から来る苦悶であり悲しみである。そして、神の臨在への癒されることのない渴きである。人は神からの疎遠のゆえに悲しむ。その悲嘆は「涙の源泉」⁽²⁸⁾ になる。クリマクスは言う。

神に従う μεταβοῶν は魂の悲しみであり、それが渴望するものを絶えず狂おしいほどに求めて止まない心の性向である。それを追求めて挫折したときでも痛ましいほどにそれを追求め、悲しいほどの嘆きに揺り動かされてさえも、それを憧憬する。⁽²⁹⁾

嘆き悲しむこと (μεταβοῶν) は神から分かち難くあると自覚しつつも己の信薄さからくるすさみを嘆くこの身にさえも神からの恩恵が注がれていることを十全に感じ取ること

である。そのことに感謝し涙しながら、絶えざる祈りと沈黙がもたらす静寂のうちに神へと向かう霊的な生命へ行き着くための架け橋である。そのうちに足を踏みしめて歩みを重ねて行く時、神からの感謝が忽然と修道士を包み込む。

嘆き悲しむこと (μεταβοῶν) の深淵には慰めが見える。そして、心の純潔さは神からの照明を受け取る。神からの照明とは、不可知なものな中で、えもいわれぬはつきりとは名状し難い働きであり、それとは知らずに気づき、そして見るともなく見える働きである。慰めとはまさに子供のように大声で泣き喚いたり、同時に幸福そうに喋ったりする、そうした魂の生気の回復である。神の救済は痛ましい涙を苦痛から癒えた涙に至らせ、驚くべき仕方で深い悲しみによって打ちひしがれた魂を刷新する⁽³⁰⁾。

そうして刷新された魂はますますこの世にあつて世捨て人 (ἐρημικός) のように打ち捨てられた存在となりはしても、霊的な生命へと向かう修練を通じて、いつそう神へと近づくと本国への途に連なるであろう。そのゆえに、「流謫」と

は修道士にとつて彼の住まうべき本来的な「本国」を目指す道行と言えるであろう。「この世の寄留者」としての現し身の生が痛ましければ痛ましいほど、檻樓をまとつての道行が惨めであれば惨めであるほど、絶えざる祈りと沈黙と孤独のうちに神の愛の満ち溢れをその慰藉として一心に身体に受け取ることであろう。そのような至福を切望するからこそ、この道行を辿るしかないと修道士は決するのである。そこに「流謫—この世の寄留者となること」とは何かの結論を置きたい。

3. 「神の前に立つ人間」とは誰か

以上が、三位一体の象徴を担う第三の階梯である。それを苦勞して攀じ登った者は、右にも左にも彼の視線を逸らすことはない³⁾。

クリマクスはこのようにして第三の階梯を終える。この最後を締める言葉は何ら飾り気のない、たった二行に過ぎないエピソードであるが、ここにこの階梯の意義を導く重要な示唆が含まれているように思われる。

「三位一体」とは、「父なる神」と「子なる神」と「聖靈なる神」とがそれぞれ三つの自存者（ヒュポスタシス）であり、かつ一つの実体（ウーシア）として完全に一致・交流することを意味している⁴⁾。クリマクスはこのことを象徴的に捉え、ここに至るまでの三つの階梯で取り上げてきたことを一つに総合しようとする。すなわち、「この世の放棄」、「欲望から超然としていくこと」、「そして「流謫—この世の寄留者となること」の三段の要求が一体となつて、「この世から離脱すること」の成就に向けて収斂して行く。それは三つの支流に分かたれて流れてきた川の流れが、愈々神へと向かう本流へと一気に交差する流れとなることを意味する。その流れのただ中に今まさに立とうとしている「神の前に立つ人間」とは、いったい誰なのか。その間に応答しなければならない。

第一に、その彼は、この世で生きた己のさまざまの社会的佇まい、虚栄・名譽心・出世欲や性欲といった欲望の諸相、分けても家族を含めた係累、そして故国といった己の存在証明を担ったことどもすべてを自ら剥ぎ取り無一物となった存在と言えよう。そのような己が全身全霊を込めて神に立ち向かうとき、「修道の初めに立つ」人間を超えて

愈々、この地上にあって本来帰属すべき国籍である本国へ至り着くことを真実、神を面前にして切望する。その彼を「神の前に立つ」人間と呼ぶことができよう。

第二に、この「神の前に立つ人間」の前には、もはや右にも左にも視線を逸らすことのない、神への真つ直ぐな途がその彼の眼前にどこまでも披かれてあるということである。そこに至ったということは、その途の先には、尚、幾多のうねりがあり、攀じ登るに急な坂があり、通るに狭い道があり、超えるに高い障壁があり、平生を掻き乱す暗澹とした内面の葛藤が待ち受けているであろうが、クリマクスが終局の段階として位置付ける「信・望・愛」⁽³⁾の、とりわけ「神の愛（一ヨハ4・8）」へと到り着く、まさにその一步を踏み出した、ということの意味するであろう。その新たな地平の披きとは、何もかも棄て去って神にひたすら信従して生きることを決意した者だけが獲得することのできる徹底して神の意思に依拠して、神との合一へと向かう生への招きに応答し、真実、キリストに参与する者（cf. ヘブ3・14）となった人間である、と言えよう。

結語

ここまで、私たちは「この世の放棄」に至る初期の三段階である *amotryn*（放棄）、*amponitbeia*（欲望からの離脱）、*teuteia*（流謫—この世の寄留者となること）を考察してきた。

端的に言うなれば、この三段の道行は修道士個々の内外の状況を相克し超出し、愈々「神の前に立つ人間、そして黒衣を纏った世捨て人（*teuteia*）」としてこの世に寄留しながらも、神の住まう本国を目指して神に付き従う信従者としての道行を決する *teuteia*（流謫—この世の寄留者となること）に収斂していく道行であった。

したがって、その生を全うするためには、この世を離脱して神の呼ばれるその声に従ってキリストに倣う生の時間をこの世の世捨て人（*teuteia*）＝「クセノス」として徹底的に生きることが求められたのである。「神の前に立つ人間」とはそのような生をこそ純粹に希求する人間を言うのではないか。

何故、そのことが求められるのか。己に拘泥し、執着し、そしてすべての己の価値が恣意的な人間の側に立つ基準に

よって測られるならば、そこにはキリストに倣う生も神に倣うての己の無化もないからである。

信仰者の模範としてのアブラハムを描出した『ヘブライ書』一一章八節から二〇節には、以下の記述がある。

「信仰をもって、この人たちは皆死んだ。約束〔されたもの〕は受けず、遠くからそれを見て、挨拶を送り、また自分たちが地上では外国人、仮住まいの者(寄居者)であることを信仰告白したのである。このように告白する人々は、自分たちが祖国を熱望していることを公言している。彼らが仮に自分たちの出てきたあの〔祖国〕を思っていたとすれば、帰る時もあっただろう。しかし実際には彼らはよりよい、つまり天上の〔祖国〕を切望している。それゆえ神は彼らを、〔また〕彼らの神と呼ばれることを恥としない、彼らのために都を準備したのだから。」(ヘブ11:13-16)

自分たちの出てきた祖国よりも天上の祖国に至り着きたいという究極の希望が魂の錨ともなって、修道士は、仮

住まいの者¹¹世捨て人(クセノス)として、神に捕らわれた者としてこの世に繋がれる。しかし、その彼はこの世の人々の信仰の前進と喜びのために肉に留まって、師父アントニオスがそうであったように、天上の祖国を目指すことが、再びこの世に神の似姿として変貌を遂げ帰還し得るよう己の徳を磨く、次なる階梯へと歩みを進めて行くのである。

《参考文献》

- J.-P. Migne (ed.), *Patrologia Graeca*, t.88, Paris 1864, 1096-1164.
John Climacus, *The Ladder of Divine Ascent*, translation by Colm Luibheid and Norman Russell, Paulist Press, New York/Ramsey/Tronto 1982.
Saint Jean Climaque, *Échelle Sainte*, Traduction française par le P Placide Desesille (Spiritualité Orientale 24), Abbaye de Bellefontaine, Bégrolles-en-Mauges 1978.
St. John Climacus, *The Ladder of Divine Ascent*, translated by Archimandrite Lazarus Moore with an Introduction by M.

Heppell/Faber and Faber, London, 1959.

日本聖書協会 二〇〇四年。

Walter Voelker, *Scara Paradisi, eine Studie zu Johannes Cimacus und zugleich eine Vorstudie zu Symeon dem Neuen Theologen*, Wiesbaden 1968.

注

John Chrystavgis, *John Cimacus, The Egyptian Desert to the Sinaiit Mountain*, published by Ashgate Publishing Limited, 2004.

(1) gr.1, 644A. 修道士の使命は「このうちにある。「彼の熱意を打ち棄てることなく絶やさず保ち続ける者であり」、「日々、修道士は熱慮に熱慮を重ねる。「火に火を、熱意に熱意を、願望に願望を……」

中世思想原典集成3『後期ギリシア教父・ビザンティン思想』大森正樹監修、平凡社、一九九四年。

大森正樹監修、平凡社、一九九四年。

(2) gr.1,644 A.

大森正樹『祈りの系譜(1)―ヘシユカスム研究 序論―』、『エイコーン』第10号、新世社、一九九三年。

(3) gr.2, 656 C; Gr.17, 928 B; Gr.26, 1084 D.

大森正樹『祈りの系譜(7)―ヘシユカスム研究 ヨアンネス・クリマクス(1)』、『エイコーン』第25号、新世社、二〇〇二年。

(4) gr. 3, 665 C- 668 B; gr. 26, 1017 B.

大森正樹『祈りの系譜(8)―ヘシユカスム研究 ヨアンネス・クリマクス(2)』、『エイコーン』第26号、新世社、二〇〇二年。

(5) Premier Degré 21, (Step 1), 637A, DESEILLE (1978) p.36.

大森正樹『祈りの系譜(9)―ヘシユカスム研究 ヨアンネス・クリマクス(3)』、『エイコーン』第27号、新世社、二〇〇三年。

(6) Premier Degré 24, (Step 1), 637C, DESEILLE (1978) p.37.

大森正樹『岩波キリスト教辞典』大貫隆、百瀬文晃他編、岩波書店、二〇〇二年。

(7) マター・一一一「また、浸礼者ヨハネの日々から今に至るまで、天の王国は暴力を加えられている。そして、暴力的な者たちが、それを奪い取っている」。

大森正樹『祈りの系譜(9)―ヘシユカスム研究 ヨアンネス・クリマクス(3)』、『エイコーン』第27号、新世社、二〇〇三年。

(8) Premier Degré 21, (Step 1), 637B, DESEILLE (1978) p.36.

大森正樹『祈りの系譜(9)―ヘシユカスム研究 ヨアンネス・クリマクス(3)』、『エイコーン』第27号、新世社、二〇〇三年。

(9) Premier Degré 24, (Step 1), 637C, DESEILLE (1978) p.37.

大森正樹『祈りの系譜(9)―ヘシユカスム研究 ヨアンネス・クリマクス(3)』、『エイコーン』第27号、新世社、二〇〇三年。

(10) Premier Degré 31, (Step 1), 640A, DESEILLE (1978) p.38.

大森正樹『祈りの系譜(9)―ヘシユカスム研究 ヨアンネス・クリマクス(3)』、『エイコーン』第27号、新世社、二〇〇三年。

(11) Premier Degré 39, (Step 1), 641B, DESEILLE (1978) p.40.

大森正樹『祈りの系譜(9)―ヘシユカスム研究 ヨアンネス・クリマクス(3)』、『エイコーン』第27号、新世社、二〇〇三年。

(12) Premier Degré 42, (Step 1), 641C, DESEILLE (1978) pp.40-41.

大森正樹『祈りの系譜(9)―ヘシユカスム研究 ヨアンネス・クリマクス(3)』、『エイコーン』第27号、新世社、二〇〇三年。

大森正樹『祈りの系譜(9)―ヘシユカスム研究 ヨアンネス・クリマクス(3)』、『エイコーン』第27号、新世社、二〇〇三年。

大森正樹『祈りの系譜(9)―ヘシユカスム研究 ヨアンネス・クリマクス(3)』、『エイコーン』第27号、新世社、二〇〇三年。

- (13) Walter Voelker, *Scara Paradisi, eine Studie zu Johanness Cimacus und zugleich eine Vorstudie zu Symeon dem Neuen Theologen*, Wiesbaden 1968, pp.26-27.
- (14) *Ibid.*
- (15) Deuxième Degré 1, (Gradus 2), 653C, DESEILLE (1978) p.43.
- (16) Deuxième Degré 3, (Gradus 2), 656A, DESEILLE (1978) p.44.
- (17) Troisième Degré 16, (Gradus 3), 668A, DESEILLE (1978) p.49.
- (18) Troisième Degré 19, (Gradus 3), 668A, DESEILLE (1978) p.50.
- (19) 詩23:6「命のある限り 恵みと慈しみはいつもわたしを追う。主の家にわたしは帰り 生涯、そこにとどまるといふこと」。
- (20) Troisième Degré 20, (Gradus 3), 668B, DESEILLE (1978) p.50.
- (21) 創3:24「こうしてアダムを追放し、命の木に至る道を守るために、エデンの園の東にケルビムと、きらめく剣の炎を置かれた」。
- (22) Troisième Degré 1, (Gradus 3), 664B, DESEILLE (1978) p.47.
- (23) Troisième Degré 6, (Gradus 3), 664C, DESEILLE (1978) p.48.
- (24) Troisième Degré 1, (Gradus 3), 664B, DESEILLE (1978) p.47.
- (25) Troisième Degré 1, (Gradus 3), 664B, DESEILLE (1978) p.47.
- (26) 卍4・44。イエス自身、預言者は自分の故郷では誉れをえなごものだと詛ったからである。
- (27) Troisième Degré 3, (Gradus 3), 665C, DESEILLE (1978) pp.47-48.
- (28) 27.ii, 36 (1113C). Cf.26.iii, 53 (1089D-92A), 4 (1084D), 27.ii, 39 (113D).
- (29) 7.1 (801CD). Cf. 1.16 (636B), 16.11 (928B).
- (30) Step 7, 55, 813B, Moore (1959) 121.
- (31) Troisième Degré 45, (Gradus 3), 672B, DESEILLE (1978) p.54.
- (32) 宮本久雄以下編『岩波キリスト教辞典』、岩波書店、二〇〇二、四五四頁。
- (33) パウロの「コリント人への第一の手紙13章」愛の賛歌に歌われている。「1もしも私が、人間の、そして御使いたちの言葉によって語りはしても、しかし愛をもってはいないなら、私は鳴り響く銅鐃か、あるいは甲高く鳴るシンバルと化してしまっている。……4 愛は—寛容であり、親切である—愛は。〔愛は〕妬まず、〔愛は〕自慢せず、

高ぶらず、5 ぶさわしくない振る舞いをせず、自分自身
のものを求めず、苛立たず、悪しきことを企まず、6 不
義を喜ばず、しかし真理を共に喜ぶ。7 「愛は」すべて
を忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える
……13 そこで今や、信仰、希望、愛、これら三つが存続
する。しかし、それらのうちで最も大いなるものは、愛
である」。